

INTERNATIONALIZATION



そして国際協力へ —全国初の国際医療財団を設立



六十二年の〇から、六十三年の四市町七人、平成元年の十市町十四人を経、今年は二十三市町村二十九人と大幅に増えています。各市町村では、市町村立の中学校での活動が中心となりますが、その活動は学校教育の領域だけにとどまりません。地域に住み、催事や祭に積極的に参加し、生活に深く関わることでその地域の国際化が自然な形で進んでいます。学校教育での英語指導、英語教師の英語運用力向上、地域の国際化。この三つの役割を担うJETの青年たちですが、このような活動を行ううちに日本人と結婚した例もあり、交流は着実に深まっているといえます。

県民の国際感覚養成のもう一つの柱として「ホームステイカントリー・熊本づくり」があります。これは、昭和六十二年に県が「熊本の国際化をどう進めるか」をテーマに募集した県民提案の中の最優秀作で、ホームステイ受け入れ日本一づくりを目指そうと訴えたものです。昭和六十三年四月に県内百十の団体が参加して結成された熊本国際交流活性化連絡協議会のキャンペーンテーマに採り上げられました。

家庭で異文化を受け入れ、理解することでお茶の間レベルで草の根的に国際化が浸透してゆくのですね。幼い子供が異文化に触れ、驚き、そして自然に受け入れコミュニケーションしていく姿は、そのまま国際化の見本といえるでしょう。昨年は、熊本国際青少年音楽フェスティバル時に約二百人のホームステイを受け入れることができました。今後、より良いホームステイが行われるよう、ホームステイコーディネーターの育成講座を開くなど、県は各団体の中枢として機能していきます。県民一人一人が異文化との接触で次第に開かれ、異質なものを受け入れ、包容できるようになれば、環境など普遍的価値を尊重する精神が培われていくことでしょう。

「青年海外協力隊」——誰もが一度は耳にしたことがあると思います。アジア、アフリカ、中近東など開発途上国の人々のために、自分が持っている技術や経験を生かしたいという希望を持つ青年に道を開いている政府事業です。昭和四十年の発足以来、既に四十五万八千九百五十人を超える人々を派遣してきました。熊本からも昨年は十六人の青年が十三カ国へと向かいました。海外を見てみたい、自分の力を試みたい、開発途上国の現実を知りたいと動機は様々ですが、帰国後は〇日会を結成し、様々な事業を展開するなど、現地での生活体験を生かして地域の国際化に大きく貢献しています。現在、我が国は世界一の援助大国となりましたが、一方で援助のあり方に疑問や反省の声が聞かれます。我が国の援助が「南北問題」の解決に、より貢献するためには、今後きめ細かい実施体制を築いていくことが求められています。

そういう背景から設立されたのが(財)国際保健医療交流センター(理事長・細川護熙熊本県知事)です。開発途上国の保健医療の向上及び日本の保健医療協力の発展に貢献するために、保健予防事業の導入を中心に

(1) 開発途上国の保健医療専門家に対する研修事業
(2) 開発途上国に派遣される日本の保健医療専門家に対する研修事業

査及び提言

(3) 開発途上国における保健医療協力プロジェクトについての調査及び提言

を三つの柱として事業を行うことを目的に、今年二月一日に事務所を開設、四月一日から稼働しています。スタートしたばかりの現在の活動は、途上国の医療レベルの向上を図るため、その担い手となる現地の医師を熊本に招いての研修が中心です。途上国のニーズに合った援助のために体制を整え、きめ細かな施策への準備が着々と進んでいます。

このように県(行政)と県の経済界と医療界が三位一体となって国際的医療財団を設立、運営していくのは全国でも初めてのことです。今後、同財団が国際医療協力を進めるためのナショナルセンターとして機能することで、この分野における地方の取り組みのモデルとなることを目指す熊本の姿を、多くの人々に身近なものとして受けとめてほしいと考えています。

そして、このような諸施策を積み重ねていくことで開かれた国際性を持ち、独自の個性を持ち、世界に通用する地域——熊本の実現を目指しているのです。

青年海外協力隊



パラグアイに派遣された(1987年12月~1990年1月)
丸山 健さん (26才)

自分の力を試してみたいと思って、大学卒業後青年海外協力隊に参加しました。体育教師として、小・中学生を指導し、授業研究の形で先生の指導もしました。その中で社会や考え方の違いを尊重し、互いの主張をぶつけて理解し合い、協調することが必要だと感じました。それには、実際に相手の生活に触れることが一番ですね。国際化は、結局、人と人との心のふれあいです。多くの方が外国の生活に触れ、現状を理解して欲しいですね。そこから初めて本当の国際協力、援助ができるんじゃないでしょうか。

ホームステイカントリーづくり JETプログラム



熊本市西原
田中 雅子さん(44才)・聡さん(17才)親子

初めてホストを務めたのが3年前。これまでアメリカ、オーストラリアを中心にスペイン、モロッコなど延べ12カ国の人たちを23回お迎えしてきました。我が家では近所で買い物をしたり、お茶を飲んだり、料理をつくったりなど、普段の生活を楽しんでもらいます。観光より日本の生活そのものに興味を持つ方が多いようです。「特別なことより自然な中でオープンな気持ちでおつき合っていく」それが国際化への第一歩となるのではないのでしょうか。



ホチキス・ルイス・マシューさん (26才)

AETとして大矢野町で活躍中。本年4月29日、熊本の女性と結婚されました。

中学校の英語の授業の手伝いが主体ですが、時には小学校にも行って子供たちとスポーツをしたりしています。小学生の時に私と接する機会があった子供たちは、英語の授業時間によく発言をしてくれます。小さい頃から外国人と接することは、とてもいいことだと思います。町の人達はとても親切で、地域のバーベキュー大会に誘ってくれたり、よく行く寿司屋さんには家に招待されたこともあります。日本人は外国人に会うと緊張してしまう人が多いようですが、私たちはありのままの日本の姿に出会えた時、たいへんうれしく思いますので、もっとリラックスしておつきあいでほしいと思います。